

From a “Poor” Farmer’s Cooperation to a “Poor White” Farmer’s Cooperation: Populist Movement and Disfranchisement in North Carolina, 1898-1900

(「貧しい農民」の連帯から「貧しい白人農民」の連帯へ：ノースカロライナ州におけるポピュリスト運動と黒人投票権の剥奪)

Ryota Fukamatsu*

SUMMARY: In this paper, I examine the collapse of the Populists' political coalition with African-Americans at the turn of the twentieth century. North Carolina's People's Party tried to obtain an electoral fusion with the Republican Party to win the state election in 1894 and 1896. In 1898, the Democratic Party tried to win the state election. They propagated the fear of "black domination" by using caricatures in the papers. The Populists criticized such propaganda and called it "hypocrisy by the Democrats." They formed a coalition with African-Americans. However, the Democratic Party won the election.

In 1900, the State Democratic Party tried to pass a constitutional amendment for the disfranchisement of African-American voters and to gain power. The Populists criticized the move, citing that it would deny poor whites their voting rights. They did not resist the disfranchisement of African-Americans; they were afraid that educated "black elites" would gain control of the state along with white Democrats. In this paper, I focus on how the Populists changed their racial standpoint in the 1900 campaign, while criticizing the domination of the elite among both blacks and whites.

* 深松亮太 Graduate Student, Graduate School of Intercultural Communication, Hosei University, Tokyo, Japan.

はじめに

本稿は、20世紀転換期のアメリカ合衆国（以下「合衆国」と略記）で展開されたポピュリスト運動に注目し、かれらが試みた「黒人との政治的連携」¹の終焉を、南部社会で進みつつあった黒人の政治的権利の制限との関係から考察することを目的とする。19世紀後半に合衆国史上最大規模の第三政党運動として発展したポピュリスト運動は、中西部と南部の白人農民たちが中心となって組織し、かれらの経済的苦境を開拓する為に、鉄道の国有化や銀貨の無制限自由铸造（以下フリー・シルバー²と表記）などといった様々な政策目標を掲げていた。こうした運動の展開過程で、南部の運動指導者は、1877年以降続いている、白人エリート層を中心とした当時の民主党による一党支配を打倒する目的で、黒人との政治的連携を試みたのである。しかし、黒人との政治的連携を模索するポピュリストの立場は、20世紀初頭までにその論調が変化していくことになる。

ポピュリストが試みた人種間の政治的連携については、これまで様々な局面から検討がなされてきた。C・ヴァン・ウッドワードは、ジム・クロウ制度の成立過程を体系的に研究した著書の中で、ポピュリストが試みた人種間の連携と黒人差別法の立法化の関係を示した。ウッドワードは、ポピュリストによる人種間連携の試みは、白人層の階級を軸とした分裂を意味し、ジム・クロウ制度と黒人投票権の剥奪が白人層を再統一する目的で成立したと指摘している。また、ジョエル・ウィリアムソンは、勢力を強めつつあったポピュリストを打倒する為に民主党が行った黒人に対する嫌悪感を醸成する政治キャンペーン（以下「反黒人キャンペーン」と表記）に注目している。ウィリアムソンは、反黒人キャンペーンを通じて黒人から家族を守る目的を共有した白人男性たちが、経済的困窮によって失いかけた「男らしさ」を回復したことを指摘している。さらに近年の研究動向のなかでは、人種に対する合衆国社会の認識と同運動の展開の相互影響関係を考察した研究が注目されている。たとえばケント・レディングの研究では、ポピュリストが試みた人種間の連携によって、政治的組織が形成される過程における階級と人種の役割が変化したことが提起された。この研究で特筆すべきは、当時の民主党が反黒人キャンペーンを徹底的に行うことを通じて、人種の概念を構築したとする視点を提供した点である。³

このように、ポピュリストによる黒人との連携の試みは、民主党によって行われた反黒人キャンペーンの影響を強く受けたことで終焉に向

かったと解釈されてきた。しかし、本稿を通じて明らかにするように、ポピュリストたちは人々の反黒人感情が高まりを見せる状況下においても、黒人ととの政治的連携を維持する姿勢を見せていた。この事実を明らかにする為に本稿では、南部諸州のなかでも特に反黒人キャンペーンが精力的に行われたノースカロライナ州に注目する。1890年における同州の人口構成をみると、黒人人口が561,018人であり、この数字は全人口の34.7%を占めている。また同州では、16の郡において黒人人口が50パーセント以上を占めており、その多くが州の東部に集中している。これらの数値は、近隣のジョージア州(53.2%、48の郡)などと比べても決して高いとはいえない。しかし、ノースカロライナ州のポピュリストたちは、黒人票を握んでいた共和党と連立を組むことによって、州議会における与党の座につくことになる。具体的には、1894年の選挙においてポピュリスト党は、全体で50議席の上院議会において24議席(48%)を獲得し、全体で120議席の下院議会では42議席(35%)を得た。同じく共和党は、上院に18議席(36%)下院に35議席(29%)を獲得した。一方民主党の議席数は、上院に8議席(16%)下院に42議席(35%)に留まった。さらに1895年には、全国ポピュリスト党の党首であるバトラー(Marion Butler)が南部ポピュリストとして初の連邦議会上院議員の座を得ていた。共和党との提携という特殊な状況があるものの、同州のポピュリストは、南部の運動のなかで与党の座を築いた唯一の州である。それ故に民主党からの強い批判を受けたノースカロライナ州の事例を考察することで、ポピュリストの人種間の連携が終焉に向かう背景とその経緯をより具体的に明らかにすることが可能と考えられる。⁴

史料としては、民主党系の新聞『ニュース・アンド・オブザーバー』(以下N&Oと略記)とポピュリスト党系の新聞『コケイジャン』及び両党の選挙パンフレットを主に用いる。ここでは、反黒人キャンペーンの展開過程におけるポピュリストによる黒人との連携の様相とその変化を論じることを目的とする為、考察の対象とする年代を1898年と1900年の州議会の上下両院選挙に際した選挙キャンペーンに限定する。N&Oは、1880年から現在まで発行されている日刊新聞である。同紙は、民主党のヨセフ・ダニエルズ(Josephus Daniels)を中心とした70人の民主党支持者によって1894年に買収され、「反黒人」と「反ポピュリスト党」を掲げる民主党の機関紙となった。一方『コケイジャン』は、バトラーが1888年にクリントン(Clinton)で週刊新聞として発行を始めた。1895年には、ゴールズボロ(Goldsboro)とローリー(Raleigh)において増刊し、50,000部の発行部数を数える日刊新聞となった。しかし、この日刊の『コケイ

ジャン』は一時的であり、財政的な問題から発行地をローリーに絞ると共に、週刊新聞に逆戻りすることになる。このように両紙は、ノースカロライナ州の代表的な政党新聞であり、これらの機関紙を見ることで反黒人の宣伝を巡るポピュリスト党と民主党の対立を詳細に示すことができる。⁵

また本稿では、当時の新聞が視覚表現を通じた民衆扇動を行っていた点を考慮し、記事や風刺画における人種関係の表象を分析に取り入れる。ノースカロライナ州のポピュリスト運動について詳細な研究を行ったジェームズ・ビービーは、「政治風刺画が白人女性に対する脅威と黒人支配の恐怖の形成における重要なツールであった」と指摘しながらも、実際の風刺画が含意したメッセージに関する詳細な分析は行われていない。この表象分析を通じて、ポピュリストが試みた黒人との連携が南部の社会にどのようなインパクトを与える、それによってどのように人種及び階級に対するかれらのイメージが形作られつつあったのかを、より明確に理解することが可能になると考えられる。まずは、*N&O*を手がかりとして、反黒人キャンペーンの実態とその展開について見てみよう。

1. 白人女性に対する脅威と「黒人支配」の恐怖

反黒人キャンペーンにおいて宣伝されたのは、黒人が公職に就くことによって政治における黒人支配が進行することと、それによって白人女性が脅威にさらされている状況であった。ノースカロライナ州の1898年の選挙キャンペーンでは、これらの二点の批判が連日のように繰り返された。なかでも特徴的なのは、このキャンペーンの為に風刺画家のノーマン・ジェネット⁷をニューヨークから招き、彼の風刺画を効果的に用いたことである。たとえば図1は、黒人支配の恐怖とその脅威に白人女性がさらされている状況を伝える為に、当時盛んに描かれた風刺画の一つである。この図において黒人は吸血鬼として戯画化され、その翼には「黒人支配」(negro rule)、足元の箱には「連立政権の投票箱」(fusion ballot box)と記されている。そして3人の白人女性が吸血鬼（黒人）の魔の手に囚われようとしている。つまり、この風刺画が当時の人々に伝えようとしたメッセージは、州議会がポピュリスト党と共和党の手に渡ることによって、政治(=投票箱)が黒人によって支配されたと同時に、白人の女性が「野蛮な黒人」の脅威にさらされている状況だったのである。*N&O*は、1898年の8月から11月にかけてジェネットの風刺画を75枚掲載し、

図 1



The News and Observer (Raleigh), September 27, 1898.

その多くは大きく一面を飾った。また、これらの風刺画は、州や郡で行われた党大会でも配られ、識字力を持たない有権者に対して視覚的に「黒人支配」の現状を伝える効果を持ったのである。

それでは、1898年の選挙キャンペーンにおいて頻出する「黒人支配」とは、具体的に何を意味していたのであろうか。N&Oによると、ノースカロライナ州の市や郡(特に黒人人口が多い州東部)などの各行政では、多くの黒人が公職に就いていたという。民主党は、黒人が公職に就き、行政における黒人の支配力が強まることによって、人種間の社会的平等がもたらされることを危惧していた。このことから民主党は、N&Oを通じて、黒人支配が意味する恐ろしさを民衆に伝えようとした。たとえば、反黒人キャンペーンが本格的に始まった7月21日の紙面では、「黒人支配が強化された」という見出しの社説が第1面の半分を占める大きさで掲載された。その内容は、前日の7月20日に開かれたノースカロライナ州の共和党大会における協議に関するもので、なかでも特に目を引くのが、共和党選出の黒人の連邦下院議員であるジョージ・ホワイト(George

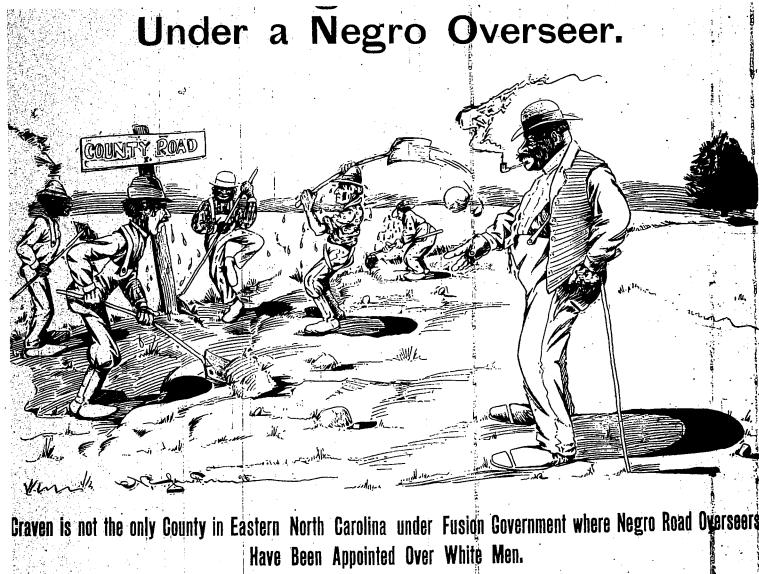
H. White) の演説である。そこでは、「私は、[白人と黒人の]社会的平等を恐れない。私は公職に就いている黒人(negro office-holder)であり、この州では、多くの黒人が公職に就くことになるであろう」⁸と述べられている。この社説は第2面にも続いており、各地区選出の議員名や党綱領、代表者たちの演説など、共和党大会の内容が詳しく掲載されている。N&Oは、この社説を通じて州議会における共和党とポピュリスト党による支配体制のもとに、「黒人支配が強化されていくことの脅威」を民衆に伝えているのである。

民主党が、黒人支配という表現を用いることを通じて、黒人が公職に就くことを批判したのは、政治を掌る能力において、黒人よりも白人のほうがより優れているという認識からであった。民主党は、1898年の選挙パンフレットにおいて、「政治的適性」について以下のように言及している。「ここは、白人の国なのだから、白人男性が管理し統治しなければならない。[中略]なぜなら、かれらは、それを黒人よりもうまくやり遂げることができるからだ。黒人たちが挑戦してみれば、彼が統治に対して無力で不向きであることが、たちまち証明されることになるであろう。」⁹このように、民主党は「政治的適正」を根拠として、黒人たちが公職に就くことを批判していたのだった。

民主党は、黒人たちが政治的適正を持たないと認識すると共に、N&Oの紙面では、黒人の怠惰と傲慢な態度が強調され、白人と黒人がしばしば対照的に論じられた。それは、「クレーヴン郡(Craven)における公道建設の黒人監督」という記事に添付された図2において顕著に表れている。この挿絵において見られるように、黒人監督は、タバコを咥えて偉そうに指揮を執っており、彼の下で働く黒人労働者は、笑いながら遊んでいるか、働いている様子をただ眺めているだけである。その一方で白人の労働者たちは、黒人監督の指揮の下で懸命に汗を流しながら働いている。この記事では、黒人監督と記者および記者と地元の白人住民の対話が掲載されているのだが、記者の質問に対する返答に注目すると、やはりそこでも黒人と白人が対比的に描かれている。つまり黒人監督は、記者の質問に対して全て簡素な返答をしていた一方で、白人住民は記者に敬意を称した返答をしているのである。¹⁰

黒人監督の記事において見られたように、黒人の傲慢さが紙面では強調されているが、黒人が公職に就く事に対する恐怖心は、なによりも人種間の社会的境界が乱されることに対する恐怖と結び付けられる傾向にあった。それは、黒人政治家のジム・ヤング (James H. Young) が教育委員長に任命されたことを伝える記事において顕著に現れている。彼に

図 2



News and Observer, September 11, 1898.

率いられた教育委員会に対する嫌悪感は、1898年の選挙における重要なテーマの一つとなるのだが、そこでは、以下のように述べられている。「人々は、黒人政治家に白人女性の教師と盲目の白人児童に対する権力行使の権限を与えると信じている。[中略]白人男性たちが白人の学校を、黒人たちが黒人の学校を統治するべきであると信じるのであれば、白人支配(White Supremacy)を擁護する政党[民主党]に投票するべきである。」¹¹この記述からわかるように、ヤングが教育委員会における権限を得た事実は、白人と黒人を隔てる社会的境界を乱すことと結び付けられ、人種の境界線を守る目的で、白人による政治支配の重要性が訴えられている。

ヤングに代表される公職に就く黒人に対する批判は、黒人を白人女性に脅威をもたらす邪悪な存在として印象付ける役割を果たした。それは、「惡魔(黒人)は、[中略]白人女性の貞淑と純潔を冒涜している」¹²といつ

た記述から垣間見ることができる。黒人男性の脅威にさらされた白人女性の保護を訴える*N&O*は、白人男性の士気を高める目的で「白人の優越性」や白人男性の「男らしさ」といった言葉を効果的に利用するようになる。それは、「黒人の悪行」という見出しの記事において明らかに表れている。この記事では、黒い獣(Black Beasts)である黒人の少年が品行の良い白人の少女を追いかけた事件が報じられ、白人民衆の怒りを煽るように、以下のような文章で結ばれている。「ブランズウィック郡(Brunswick)の白人男性諸君に告ぐ。君たちは、このような事態に我慢できるのか。」ポピュリスト党と共和党による黒人支配が続く限り、「君たちの娘は、郡をぶらつく好色な黒い獣から娘たちを守る護衛なしには、教会にも日曜学校にも通うことができないだろう。ブランズウィック郡の白人男性の勢力を高めよ、君たちの男らしさを示すのだ。共和党、ポピュリスト党そして黒人との融合の痕跡を撲滅するために投票所に向かうのだ。」¹³

これらの宣伝を通じて高められた反黒人感情と白人による政治支配の重要性は、各地で開かれた党大会でも強調された。特に10月20日の民主党大会には、5,000人もの白人民衆が集結し、*N&O*は、この大会が開かれた日を「白人男性の日」として大々的に報じた。こうして、*N&O*を中心として徹底的に繰り広げられた反黒人キャンペーンは幕を閉じ、民主党は上下両院の3分の2を占める圧倒的な勝利を収めた。¹⁴

2. 黒人支配に対する「まやかし」という批判と黒人ととの連携

*N&O*を通じて見てきたように、1898年の選挙戦において民主党は、政治における黒人支配の進行をポピュリスト党と共和党の連立政権と結び付け、白人女性がその脅威にさらされている状況を宣伝した。ポピュリスト党の機関紙である『コケイジャン』が、民主党が宣伝する「黒人支配」に対して反論を加えるようになったのは、選挙日が3週間後に迫る10月20日になってからであった。同日の紙面では、人種偏見に訴える民主党の手法が「まやかし」(hypocrisy)であるという批判をしており、第1面から第3面までは、黒人支配の眞の実態に関する記事で埋め尽くされている。少しその内容をたどってみよう。第1面では、民主党によって107名の黒人が公職を与えられたことが、その実名と共に掲載されている。続く第2面では、民主党主導のもとに行われた裁判で白人の少女が

有罪にされ、公道建設の現場での労働を強いられた経緯が述べられている。さらに第3面では、民主党によって、黒人が教育に関わる公職に就いた事実が報じられている。¹⁵

ここで注目すべき点は、黒人支配の恐怖を煽り立てる民主党の選挙キャンペーンを「まやかし」として批判する『コケイジャン』も、人種間の境界線が乱されることに対しては、嫌悪感を示しているという点である。たとえば、上述の第3面の記事では、以下のように述べられている。「ダブリン郡(Duplin)の公立学校の校長であったグレイディー(B. F. Grady)は、教師のための研修会を開催した。グレイディーは、民主党員であり、黒人と白人の双方の教師たちを出席させ、同じ室内で対談させたのである。」¹⁶この記事から明らかなように、ポピュリストたちは、白人と黒人が同じ室内で研修を受けることに対する嫌悪感を示しており、両人種の社会的な分離を当然のことと考えていたといえる。

ポピュリストたちが、反黒人キャンペーンを「まやかし」と表現することで民主党を批判したのは、かれらが「黒人支配」に関する議論ではなく、本来議論されるべき経済的、政治的な問題に関する議論を中心とした選挙戦を望んでいたことが最大の理由であった。このようなポピュリストの意図は、「白人男性の政党が必要とするもの」という社説において顕著に現れている。民主党は「人々にとって最も重要な問題に対する論争を避ける一方で、[人種に対する]偏見の感情に訴えることで経済的な諸問題を覆い隠そうと企んでいるのだ」。『コケイジャン』は、金本位主義や独占などの諸悪に反対し、より良い公立学校と州政府を築き上げることを支持する全ての善人によって団結し、人々の繁栄のために努力する。「もしも愛国的な黒人男性であれば、[ポピュリスト党に]入党すべきであり、かれらが助力を尽くす限りにおいて、愛国的な男性の共同体における少数派ではない。」10月22日にクリントンで行われたバトラーの演説においても同様の立場が示されている。「黒人は銀貨の通用を廃止し、独占やトラストを組織し、黒人と白人双方の農民や労働者に痛みを負わせ、まっとうな生活ができなくさせるために働いたのだろうか。[中略]それは違う。なぜ違うのかというと、かれらは、1896年や今日において正直であったし、[中略]銀貨を廃止する手段と方針を有する人々を批難・糾弾しようとする私のために立ち上がり、手を貸してくれたからだ。」これらの引用に示されているように、ポピュリストたちは、選挙の「真の争点」を民衆に説くと共に、改革を実行に移す目的で白人と黒人の団結が必要であることを宣言しているといえる。¹⁷

ここで一つ疑問として残るのは、民主党が日刊の政党新聞とセンセー

ショナルな風刺画を活用して「黒人支配」の恐怖を徹底的に宣伝している状況下において、なぜポピュリストたちは、白人層からの支持を減少させる危険がある黒人との政治的連携を維持しようとしたのかという点である。ポピュリストの意図として、州議会において議席数を維持・増加したいという動機が大きく働いていたとは、当時の政治状況から容易に推測できる。1898年の選挙キャンペーンに際して、バトラーは、フリー・シルバーを政策の軸として民主党と接近する動きを水面下で進めている。しかしそポピュリストの多くは、他の政策を置き去りにして、フリー・シルバーを単一の争点とすることに対する不信感から民主党との接近に反対した。自分たちの改革目標を最優先にするのであれば、二大政党との連立を拒否して独立した第三政党としての立場を貫くことが一番の道であることは、ポピュリストたちも自ら認識していた。しかし、現実的な問題として自分たちの勢力を維持するには、共和党の協力が必要だったのである。¹⁸ 前述したように共和党は、多くの黒人票を握んでおり、ポピュリストたちが黒人との政治的連携を主張した背景には、共和党との連立が大きく関係していたと考えられる。しかし、黒人との政治的連携を目指すポピュリストの主張は、黒人票を得る為の政治的な選択・戦略に基づいた行動として断定し、その意義を消極的に評価するべきではない。なぜなら、黒人との共闘を目指すポピュリストの立場は、政治家や新聞の編集者といった政党の指導者層に限られず、一般のポピュリストも共有していたからである。

まず、ポピュリスト党の選挙パンフレットの最後の章には、サラ・ミッチャエル(Sarah E. Mitchell)というバーティ郡(Bertie)の女性ポピュリストによる演説が掲載されている。彼女は、民主党が「黒人支配」の恐怖を通じて、経済的諸問題といった争点から目を背けていることを批判しつつ、「同胞である君たちは、白人農民たちと黒人の小作農たちが同一の利害を有していることを知っているはずだ。[すなわちそれは、白人と黒人の]両者が、低い税率とより良い法律、そして農業生産物の正当な価格を求めているということである」と主張し、両人種の共闘が必要であることを訴えている。次に10月20日の『コケイジヤン』の第5面と第6面をみると、そこには購読者からの10通の投書が掲載されており、その多くは選挙の争点を「黒人支配」に集約しようとする民主党を批判している。このなかで特に注目したいのは、「投票権を守る」という目的で一般の白人ポピュリストと黒人が共闘する姿勢を見せている以下の二つの投書である。まず、「私がポピュリスト党に入党した理由」という投書では、民主党がこれまでに黒人と貧しい白人を騙し、かれらの票を不正や買収の対

象としてきた点、公職を上流階級に優先してきた点などを指摘しながら、次のように続けている。「もしも民主党がこの州において勝利したならば、その時、民主党は貧しい白人男性や黒人に頭を悩ませることはなくなるだろう。君たちが民主党に投票するならば、投票権が奪われるということを、両人種の貧しい労働者に伝えておきたい。」次に、「彼が民主党を離れた理由」という投書では、民主党が進めようとしている投票権剥奪の具体的方法とその詳細に言及し、「私は貧困を理由にして、多くの男性から投票権が剥奪されることに反対である。投票権は貧しい男性にとっての唯一の武器であり、彼はこれを通じて政治的権利のために闘うことができるのだ」と述べて投書を結んでいる。¹⁹

見てきたように、ポピュリストたちは、民主党による黒人支配の「まやかし」に惑わされずに、白人と黒人が同一の利害の基に結束する重要性を説いていた。この意識は、上記の投書に表れているように、「投票権を守る」という一つの目的において一般的なポピュリストたちも共有する意識であった。しかし皮肉なことに、この貧しい白人と黒人による共闘は、貧しい白人の権利が危機にさらされることによって崩れ去ることになる。

3. 投票権剥奪を通じた「白人支配」の確立

前述したように、1898年の選挙は、民主党の圧勝で幕を閉じた。しかし、黒人人口の多い州東部では、依然としてポピュリスト党もしくは共和党の勢力が強かった。民主党は、人口の比率に占める黒人の割合によって選挙の結果が左右されかねない状況に懸念を抱いており、政治における白人の支配力をさらに強化することを望んだ。その実現の為に民主党は、財産や教育の水準を理由として投票権を制限する修正案を1899年に提出した。1900年8月2日には、州および地方議会の選挙と共に、この修正案の是非を問う選挙が行われたのだが、この選挙に先立って、ノースカロライナ州では再び徹底的な反黒人キャンペーンが行われた。本章では、この選挙キャンペーンにおいて、投票権を制限することの重要性がどのように宣伝されたのかを見てみよう。

1900年の選挙キャンペーンにおいて、民主党が徹底的に報じたのは、選挙登録および投票に際して、共和党とポピュリスト党の提携派(Fusionists)が黒人たちを利用して修正案の可決を暴力的手段で妨害するという宣伝であった。たとえば、「提携派たちの計画が実行に移される」

From a “Poor” Farmer’s Cooperation to a “Poor White” Farmer’s Cooperation

という見出しの挿絵と共に掲載された記事では、黒人たちと共和党員は、「棍棒を持って投票箱の前に立ち、選挙監督官 (poll registrar) と選挙登録官 (poll holder) の頭を棍棒で殴るであろう」²⁰と報じた。この記事では、提携派と黒人たちによる流血の惨事に対抗する為に、白人男性の結束が促された。

*N&O*は、黒人たちが計画している暴行を報じると共に、不正や買収を扇動する存在として黒人を印象付け、白人民衆の反黒人感情を煽っている。図3は、黒人たちが投票権を制限する修正案の反対票を買収によって得ようとしていることを伝える風刺画である。ここで描かれているのは、共和党の元州議会議員であるホルトンが黒人に操られて、白人票を買収するための資金を集めている様子である。ホルトンは、紐に繋がれ、尻尾が生えた動物として描かれている。民主党は、この挿絵のなかで、ホルトンを黒人のペットのように描くを通じて、共和党の弱体化を風刺すると共に、白人民衆に対して黒人支配の恐怖の帰結を再び訴えたと

図 3



News and Observer, July 3, 1900.

いえる。²¹

このような、投票日当日に黒人たちが計画している悪事と共に*N&O*は、黒人による犯罪を報じることで白人民衆の怒りを煽った。紙面では、「急いで立ち去った火災現場をうろつく黒人——幼い少女が焼死」、「黒人による少女暴行未遂——被害者は良家の娘」、「群衆によるリンチ——黒人が犯した罪に対する報い」といったセンセーショナルな見出しと共に、黒人による犯罪が伝えられた。これらの記事では、1898年の選挙と同様に白人女性が被害の対象とされることが多く、その脅威の撲滅という目的で白人男性の結束が促された。たとえば、黒人男性が、オバーマン(Edwin Overman)という白人女性の寝室に侵入したことを伝える記事では、近隣に住む数名の男性たちがこの黒人を追跡し、逮捕した経緯を伝えることで、白人男性の勇敢さと団結力が示された。²²

*N&O*は、黒人による犯罪にする報道と、それに立ち向かう勇敢な白人像を伝えると共に、投票権の制限を支持する民主党の有力者たちの演説を掲載することで、「白人支配」の実現を望む民衆の声が高まっていることを購読者に伝えようとした。特に1900年の州知事選挙に民主党候補として選出されたアイコック(Charles Brantley Aycock)は、投票権の制限に関する演説を州の各地において精力的に行なった。6月14日のゴールズボロでの演説には、5,000人の群集が集まったことが伝えられており、白人支配を熱烈に訴える彼に関心が集まっていたことが窺える。アイコックは演説において、「マリオン・バトラーと彼の脅迫によって妨害された選挙登録官は、我々を抑止することはできない。全てのノースカロライナ州の過激な提携派は、この州の男らしさ(manhood)を萎縮させることはできないのだ」と述べた。そして、修正案に賛成する人々に対して、政治における白人支配を求める者の団結を訴えたのである。また、下院議員候補者のブルックス(A. L. Brooks)は、「我々は黒人と食事を共にすることはおろか、黒人が私たちのベッドで寝ることを許すことはできない。[中略]我々が黒人たちに同様の権利を許している限り、黒人たちは我々の社会を規制するための投票を行うことになるだろう」と述べている。彼の発言が示しているように、黒人から投票権を剥奪することは、人種の境界線を明確にするという目的と密接な関係にあったといえる。²³

アイコックの演説に見られるように、彼はポピュリスト党と共和党を修正案に反対する敵として徹底的に批判している。その一方で*N&O*は、修正案に賛成の立場を示しているポピュリストの論考を紙面に掲載することで、この法案に対して政党を超えた支持が集まっている状況を伝えようとした。たとえば、バスビー(C. M. Busbee)の論考では、南北「戦

争によって生じた衝撃が落ち着いていないことによって、南部の諸州において黒人票が都合よく利用されてきた。このことは文明に対する罪悪的な行為である」と述べられている。このように発言するバスビーは、黒人たちに投票権が与えられたことで、黒人票をめぐる不正や買収が増加し、南部の政治と白人たちの結束に亀裂が生じたと考えていた。そして、黒人から投票権を奪うことは、彼が回想する古き良き南部の文明の回復に繋がるということを白人の民衆に訴えた。²⁴

これらの演説や論考が示しているように、民主党が投票権を制限することで築き上げたかったのは、州の政治が白人によって統治される理想社会の実現であった。そして、白人男性の政党である民主党に投票することは、自分たちが白人であることを証明する行為として宣伝された。それは、民主党のスポーツ・パーソンであるオズボーン (Frank I. Osborne) が、7月 26 日にシャーロット (Charlotte) で行った演説において顕著に現れている。オズボーンは、「もしも、私がある男性になぜ民主党に投票するのかと訊ねたとしたら、[中略] 彼は民主党員である理由を、自分自身が白人であり、白人の優越性を感じているからだと答えるであろう」と述べている。²⁵

「白人支配」の実現を強く望む白人民衆たちは、次第に過激派集団を組織し、その行動は暴力性を帯びていった。その一つは、いわゆる「赤シャツ隊 (Red Shirts)」と呼ばれる民主党の過激派である。1900年の*N&O*では、かれらの動向に対する関心が示されている。たとえば、アイコックとその賛同者たちが7月 21 日のホワイトビル (Whitevill) で行った演説には、多くの赤シャツ隊が拳銃を携帯して参加したことが報じられている。もう一つの過激派集団は、「白人支配クラブ」(White Supremacy Club) である。7月 20 日に行われたウェイク郡 (Wake) における選挙キャンペーンの成功を伝える記事では、1898年の前回よりも、白人支配を訴える民主党に賛同する白人群衆が倍増したことが報じられた。そして、白人支配に対する熱気が高まったウェイク郡では、キング (A. W. King) をリーダーとする、42人のメンバーによって構成された「白人支配クラブ」が結成された。*N&O*が「赤シャツ隊」や「白人支配クラブ」のような過激派の動向を伝えた意図は、投票権法の修正に反対する人々に威圧感を与えるためであり、かれらも自警団的な活動を通じてその存在力を示そうと試みたのである。事実、投票日の前日には黒人が多数派を占める郡の投票所に赤シャツ隊が武装して集結し、修正案に反対する有権者たちを威嚇した。赤シャツ隊は、投票日当日に投票所に現れることはなかったが、結果として修正案は 58.7% の得票で可決した。²⁶

4. 人種間の政治的連携から貧しい白人の連帯へ

1898年の選挙の敗北は、ポピュリスト党及び共和党に大きな打撃を与えた。ポピュリスト党は、1896年の選挙において単独で27郡で勝利したのに対して、1898年の選挙では、たった2郡でしか勝利できなかつた。また共和党は1896年の選挙において、黒人人口が過半数を超える16郡の内15郡で勝利していたが、1898年の選挙では7郡でしか勝利できなかつた。1900年の選挙においてもそれまでと同様に、ポピュリスト党は共和党との連立を維持していたが、黒人との政治的提携に関しては、その態度に変化が現れることになる。その変化は、黒人人口の多い地区での共和党の敗北が影響を与えたと考えることもできるが、それよりも大きく影響を与えたのは、民主党が提案した「修正案」を巡る議論を通じてであつた。つまり、ポピュリストたちは、「貧しい白人の権利」の固守を最優先の課題とし、かれらの危機意識を高めることで政党を超えた「貧しい白人の連帯」を主張し始めたのである。まずは、1900年のノースカロライナ州のポピュリスト党綱領から、投票権法の修正に対する危機意識を探つてみよう。

この綱領では、民主党が提起した修正案を以下のように批判している。修正案において述べられている極悪非道な憲法違反である第5項は、「祖父条項の名で知られている。しかし、この憲法違反の条項には[中略]民主党によって、[貧しい白人が]投票権を剥奪される重大な危険性を残している。[民主党に]投票した人々の無知に過失はないが、[中略]民主党は、かれらから投票権を剥奪し、かれらの無知を犯罪と同列に並べようとしているのだ」。ポピュリストたちが綱領を通じて批判しているように、投票権を制限する修正案の第5項では、民主党が黒人だけでなく、貧しい白人からもその権利を剥奪しようとしていた事実が確かに窺える。修正案は、選挙登録に当たって人頭税の納付と法律に関する識字テストを受けることを条件として規定している。その一方で、祖父条項の採用によって、貧しい白人の権利に対する配慮がなされているように見える。しかし、第5項では「1908年12月1日までの期間に、選挙登録を行うことができなければ、この州で行われるいかなる選挙においても、選挙登録と投票する権利を否定される」と記されている。²⁷

つまり、ポピュリストたちが危惧しているように、「全ての白人の少年が[選挙権を得られる]年齢に達したとしても、1908年以降は、かれら[白人少年]が読み書きできなければ、黒人と同じ立場に置かれ、投票することができない」のである。さらに綱領では、投票権の修正案における「不

道徳は、不快で面倒な階級である黒人の全住民と、最も誠実で親切であり秩序正しい人種[白人]の投票権を完全に剥奪することである」と述べられている。ポピュリストたちは、黒人のことを「不快で面倒な階級」とする一方で、白人を「秩序正しい人種」とすることによって、両人種を明確な差異の下に分類しているといえる。上記の引用からわかるように、ポピュリストたちは投票権法の修正案によって貧しい白人が投票権を剥奪されるという危機に直面することで、黒人との連携の姿勢を示していた態度を一変し、貧しい白人と黒人の間に境界線を引きはじめたのである。²⁸

1900年のポピュリストの選挙キャンペーンの特徴は、民主党と同様に党の有力者たちの演説が効果的に引用された。そこで繰り返し強調されたのは、貧困に起因する教育程度の問題と投票権の制限の関係についてである。図4は、6月16日のモーガントン(Morganton)で行なわれたバトラーの演説の内容を伝える風刺画である。一見するとこの図は、「白人支配」と書かれたバッジを胸に着けた少年に対して、バトラーがその真意を確かめていることを示しているように見える。しかし、この図に付された記事を読むと、そこで問題にされているのは、白人支配そのものではなく、この少年が文字を読めないという事実である。バトラーは、現在11歳で、識字力を持たないこの少年に対して、選挙権を得られる「21歳に達するまでに、君は教育を受けることができると思うか」と訊ねた。すると少年は、教育を受けることができないことを恐れていることをバトラーに伝えた上で、「僕は、貧しいので、働かなければならぬのです」と答えた。この少年との会話の後にバトラーは、この少年が選挙権を得る年齢に達したとしても、「彼は投票権を奪われるのであり、この州に住む全ての12歳以下の白人の少年が同じ状況に立たされるのだ」と聴衆に訴えた。²⁹

そしてバトラーは、「もしも、あなたが裕福かつ教育を受けた者であり、あなたの息子から投票権を剥奪する危険のある陰謀に投票したならば、彼を都会の黒人野郎(town negro dude)よりも下位に位置づけることになるのだ。投票する権利を奪われたあなたの息子は、大災害を引き起こす愚かな投票を行ったあなたを許すことはないだろう」と聴衆に訴えた。この演説からは、投票権を奪われた貧しい少年が、黒人よりも下位に位置づけられることに対して、バトラーが強い嫌悪感を有していたことがわかる。以下では、投票権を制限する修正案をめぐる議論によつて顕在化した、教育と貧困の問題をめぐるポピュリストたちの危機意識を見てみよう。³⁰

■ 4



バトラーの演説に見られたように、ポピュリストは、貧しい白人の少年が教育を受けられることによって、政治的権利が否定されることに対する危機感を有していた。そのため『コケイジャン』では、貧しい白人の少年が投票権を奪われることを危惧する記事を掲載することで、白人たちの危機感を募ろうとしている。「白人の少年たちから投票権が奪われる」という記事では、12歳以下の子供たちに対して教育を施すことで、かれらの選挙権を守ると宣伝する民主党に対して、以下のように批判している。「この州には、1,600人の学校に通う年齢に達した子供たちがいる。[しかし、その内の]800人の子供しか入学しておらず、ほぼ毎日通っているのはたった400人である。[中略]この修正案には、白人の優越性などどこにもなく、貧しい白人の少年たちを格下げし、奴隸に仕立て上げるのだ。」³¹

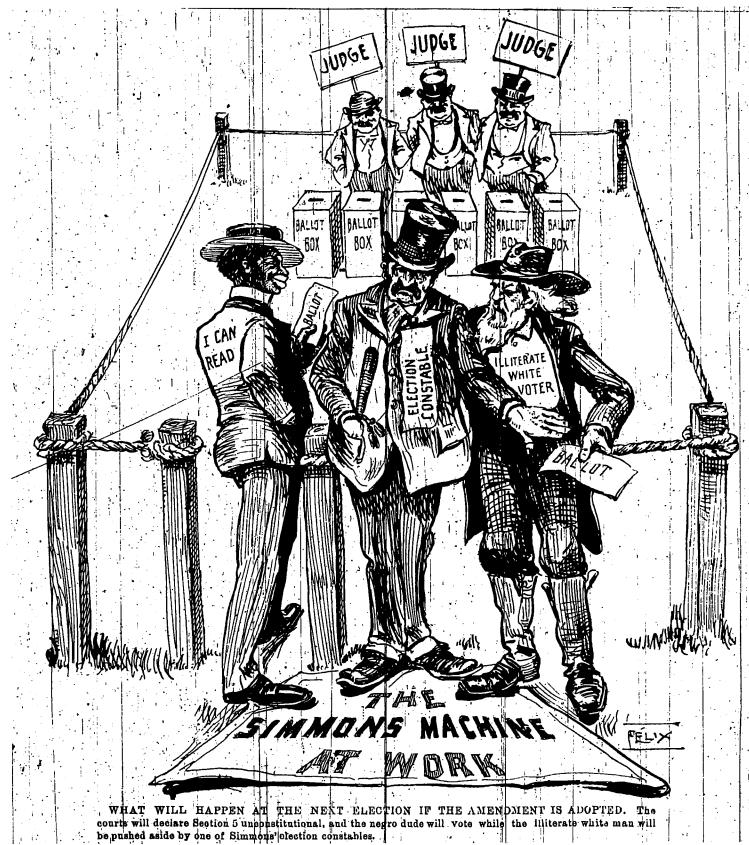
ポピュリストたちが貧しい白人の少年たちの権利を危惧するのには、当時の識字率が大きく関係している。1900年の国勢調査を見てみると、ノースカロライナ州における白人の有権者数は286,812人おり、その内の18.9%に当たる54,334人が文字を読むことができない。一方で黒人の総人口は、127,078人であり、文字を読むことができるのは、その内53.1%に当たる67,481人である。全体では、29.1%に当たる121,815人が文字を読めないことになる。ポピュリストたちは、1900年の段階において約2割の白人男性が文字を読めない現状と、教育を受けている子供の割合を照らし合わせた上で、修正案が機能し始める8年後の状況に危機感を示したといえる。³²

ポピュリストたちは、修正案が対象とする投票権の制限が、黒人だけでなく教育を受けることができない貧しい白人をも対象としていることを指摘し、その否決の為に貧しい農民や労働者たちが団結することの重要性を説いた。しかし、ここで言う団結から黒人たちは除外されていた。バトラーの演説に見られたように、貧しい白人が識字力を有した都会の黒人たちよりも下位に位置づけられることに対して、ポピュリストたちは嫌悪感を示していた。ポピュリストたちは、教育を受けた都会の黒人たちが投票できる可能性を有していることを批判しているうちに、黒人たちを教育程度の低い貧しい白人の敵として認識し始めたといえる。つまり、ポピュリストたちは投票権の制限に関する議論をきっかけとして、人種の違いに対する意識を強化し、両人種の間に境界線を引いていったのである。

それは、6月14日の『コケイジャン』に掲載された図5において明らかに現れている。この図では、前方左側に立つ黒人が、誇らしげな表情

を浮かべながら投票箱に向かっている。彼は、小奇麗なスーツを着ており、背中には、「俺は文字を読むことができる」と書かれている。中央では選挙管理官が、右にいる白人を投票箱に向かわせないように、牽制している。その白人は、左側の黒人よりも古い服を着ており、彼の胸には、「識字力を持たない白人有権者」と書かれている。そして、この白人は黒人および選挙監理官を睨みつけている様子が見て取れる。さらに、この図には以下のようない説明が加えられている。「次の選挙で修正案が採択された場合、何が起こるのだろう。[中略]黒人野郎が投票できるのと同時

図 5



に、識字力を持たない白人は、わきに追いやられるのだ。」³³

1900年の『コケイジャン』において散見される「(都会の)黒人野郎」という表現は、教育を受けた黒人を示しており、バトラーおよびポピュリストたちは、この用語を通じて黒人のエリート層に対する嫌悪感を強めていった。『コケイジャン』に寄せられた、ロブソン郡(Robson)の市民からの手紙では、「都会の黒人野郎が投票箱の前で待つ姿と、[中略]正直だが、貧しい上に忙しく、識字力を持たない白人の権利が永遠に否定されることによって、黒人の上流階級が現れる」のを見たいのであれば、民主党の修正案に賛成票を投じれば良いと述べている。この手紙の一節が示しているのは、民主党の修正案が可決された場合、教育を受けた黒人が選挙監督官に指名されることと、貧しい白人の投票権が否定される可能性に対する憤りである。投稿者は、この手紙の結びにおいて「我々は自由な政府と自由な投票権を信じており、[中略]民主党が赤シャツ隊に固執し、流血の暴動で威嚇しようとも、自由民(free men)である我々は高潔さと忍耐を持って自らの権利のために闘う」と宣言している。³⁴

また、「『白人支配』の黒人」という記事では、民主党の政治「マシーンは、大胆にも選挙監督官に黒人を任命することによって、[民主党の]白人を守ろうとしている」と報じている。前述した「白人支配クラブ」のジョーンズ郡(Jones)での結成を報じる記事では、「このクラブでは、ノア・ヒル(Noah Hill)という黒人が、この郡における[民主党の政治]マシーンによって会長に任命され、この黒人は『白人支配』の手先として精力的に活動している」ことが伝えられた。このように『コケイジャン』は、黒人エリートを貧しい白人の敵として徹底的な批判を繰り返した。³⁵

第3節で見たように、民主党は投票権の制限を通じて、ポピュリスト党と共和党の提携と黒人の関係を打倒し、政治が白人によって統治される理想社会の構築を訴えていた。これに対して『コケイジャン』では、民主党が白人と黒人のエリート層によって、政治支配を行おうとしていることを批判し、貧しい白人の権利の擁護が主張された。しかし、1898年の選挙の時に見られた貧しい黒人との連携を呼び掛ける直接的な記述は見られない。この事実は、貧しい白人の権利制限という危機が一つの要因となって、ポピュリストの黒人に対する態度に変化が現れたことを示しているといえる。また、ポピュリストたちは人種に対する意識の変化と同時に、持つ者と持たざる者といった階級的区分をより明確に認識したといえる。それは、図6の風刺画において、明らかに現れている。

この図では、立派な服に身を包んだ白人と黒人の「上流階級」が共に

穏やかな表情を浮かべながら、堂々と胸を張って立っている。その一方で右側では、ぼろぼろになった服を着た、識字力を持たない白人と黒人が立ちすくんでいる。さらに興味深いのは、白人と黒人の上流階級と貧しい白人と黒人の間に境界線が引かれていることである。この挿絵には、「もしも、民主党の修正案が採択されたならば、ノースカロライナ州[の政治]は、『白人上流階級』と、『黒人上流階級』によって支配されることとなり、識字力を持たない白人男性と黒人(darky)は除外されることになるであろう」と記されている。

見てきたように、民主党が1899年に提案した投票権を制限する修正案は、ノースカロライナ州の政党間に大きな議論を巻き起こした。ポピュリストたちは、この修正案が貧しい白人の投票権を剥奪するものと捉え

図 6



Caucasian, July 26, 1900.

て民主党を徹底的に批判した。そしてかれらは、この批判を繰り返すうちに、政治的連携の対象としていた黒人たちに対する認識を変化させていったのである。

おわりに

本稿では、ポピュリストが試みた黒人と白人の政治的提携が終焉に向かった背景をノースカロライナ州を事例として考察してきた。ここでは特に民主党が徹底的な「反黒人キャンペーン」を繰り広げた1898年の選挙と、投票権の制限が争点となった1900年の選挙に注目し、これらの選挙の争点に対してポピュリストたちがどのように対応し、自分たちの黒人に対する態度を変化させていったのかという点に留意した分析を心がけてきた。そこで最後に本稿を通じて明らかにしてきた事実を再度確認することによって、本稿の結びとしたい。

ポピュリストたちは、1898年の徹底的な反黒人キャンペーンにさらされながらも、「共に貧しい」という事実を重要視し、黒人たちを改革を推進する仲間として認識していた。その一方でポピュリストたちは、人種間の社会的境界線が乱されることについては、民主党と同様の嫌悪感を有していた。このような一見すると矛盾するかに見えるポピュリストの態度は、別の視点から見るとかれらの人種と階級に対する態度を的確に示しているように思われる。つまり、「反黒人」の機運が高まる当時の状況下で、ポピュリストたちは必然的に人種間の違いに対する認識を強めていったのだが、それでも尚かれらにとって、「貧しい」と「豊か」といった階級的な違いが重要であった。このような、人種よりも階級的な差異を重視するポピュリストの思想が黒人との政治的連携を可能にしたのである。

1899年に提案された投票権を制限する修正案は、上記のポピュリストの認識に大きな影響を与えた。ポピュリストたちは1900年の選挙において、貧しい白人の権利を擁護することのみを主張し、黒人の政治的権利についての主張は行わなかった。このポピュリストの態度の変化は、ポピュリストたちが人種の差異に対する認識を強化した事実を表しているといえる。そしてこの事実は、レディングが示したような政治的な組織化における階級と人種の役割の変化が、20世紀転換期のノースカロライナ州で起こったことを示しているように見える。しかし本稿を通じて見てきたように、人種に対する意識の強化は、必ずしも階級に対する認識

の薄れを結果したとは言い難かった。ポピュリストたちは、投票権の剥奪が財産や教育の水準を基準として行われつつある状況下で、貧困層の団結から黒人を除外すると共に、エリート層の黒人を最も憎むべき存在として批判していた。つまり、かれらは、「持つ者」と「持たざる者」といった階級による境界線を明確に認識すると共にそれを重要視していたといえる。この事実からわかるように、ポピュリストたちは、投票権の制限を巡る議論を通じて、人種に対する認識を強化すると同時に、階級に対する意識を改めて強めていったのである。

Note

- 1 白人のポピュリストたちは目指したのは、黒人ととの「政治的平等」であり、黒人と白人が社会的平等を達成することについては、一貫して否定的な態度を示し続けた。この点については、以下の文献に詳しい。Gerald H. Gaither, *Blacks and the Populist Movement: Ballots and Bigotry in the New South* (Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1977; revised edition, 2005).
- 2 当時の農民たちは、農産物価格が下落する一方で、生産物の輸送や倉庫管理に要する費用が値上がりし、それによる債務に悩まされていた。ポピュリストたちは、債務問題を解決する為に貨幣量を増大することを求めた。その為にかれらは、銀と金を 16 対 1 の比率で無制限かつ自由に鑄造することの実現を主張した。「フリー・シルバー」とは、金本位制に替わって金銀複本位制を唱える立場の人々が使用した用語である。
- 3 C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow*, 3rd. ed. (New York: Oxford University Press, 1974); Joel Williamson, *The Crucible of Race: Black-White Relations in the American South Since Emancipation* (New York: Oxford University Press, 1984), 300-6; Kent Redding, *Making Race Making Power: North Carolina's Road to Disfranchisement* (Urbana: University of Illinois Press, 2003).
- 4 Cambell Gibson and Kay Jung, "Historical Census Statistics on Population Totals by Race, 1790 to 1990, and by Hispanic Origin, 1970 to 1990, For The United States, Regions, Divisions, and States," [U. S. Census Bureau] available from, <http://www.census.gov/population/www/documentation/twps0056/twps0056.html>, Internet accessed September 15, 2011; Gather, *Blacks and Populist*, 241-45; Helen G. Edmonds, *The Negro and Fusion Politics in North Carolina, 1894-1900* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1951), 37; James M. Beeby, *Revolt of Tar Heels: The North Carolina Populist Movement, 1890-1901* (Jackson: University Press of Mississippi, 2008), 81, 230.
- 5 James L. Hunt, *Marion Butler and American Populism* (Raleigh: University of North Carolina Press, 2003), 26, 81.
- 6 Beeby, *Revolt of Tar Heel*, 174.
- 7 ジェネットの風刺画は、彼がニューヨークで芸術を学んでいた当時にすでに全国紙

From a “Poor” Farmer’s Cooperation to a “Poor White” Farmer’s Cooperation

で取り上げられていた。このことから、1898 年のキャンペーンに協力する為の彼の帰郷は、*N & O* で大きく報じられた。さらに彼は、キャンペーンの終了後に民主党のリーダーたちから活躍を称賛され、63 ドルの報奨金を得た。その後ジェネットは、再びニューヨークに渡り『ヘラルド』紙を始めとした多くの主要雑誌に風刺画を提供し、その名が広く知られるようになった。H. G. Jones, “Jennett, Norman Ethre,” in *Dictionary of North Carolina Biography*, ed. William S. Powell (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), 3: 278-79.

8 *News and Observer* (Raleigh), July 21, 1898.

9 State Democratic Executive Committee, *Democratic Handbook, 1898* (Raleigh: Edwards & Broughton, Printers and Binders, 1898), 38. [Documenting the American South] available from, <http://docsouth.unc.edu/nc/dem1898/menu.html>, Internet accessed September 15, 2011.

10 *News and Observer* (Raleigh), September 11, 1898.

11 *News and Observer*, August 25, 1898. 一般的に white supremacy は、「白人優越主義」と訳されるが、この言葉には、domination と同義の「支配」という意味も内包されている。また、反黒人キャンペーンにおいては、白人の優越性を示すよりも、「黒人支配」と対比的に用いられている経緯がある。したがって本稿では、訳語を、文脈によって使い分けることにしたい。具体的には、「黒人支配」と対比的に用いられている場合には、「白人支配」とし、明らかに優越性を示す意図が認められる場合は、「白人の優越性」の訳語を当てることにする。

12 Ibid.

13 *News and Observer*, September 23, 1898.

14 *News and Observer*, October 21, 1898.

15 *The Caucasian* (Raleigh), October 20, 1898.

16 Ibid.

17 *The Caucasian*, October 6, 1898, November 3, 1898.

18 Beeby, *Revolt of the Tar Heels*, 175-79.

19 State Executive Committee of the People’s Party of North Carolina, *People’s Party Hand-Book of Facts, Campaign of 1898* (Raleigh: Capital Printing Company Printers and Binders, 1898), 95-96. [Documenting the American South] available from, <http://docsouth.unc.edu/nc/peoples/menu.html>, Internet accessed September 15, 2011; *Caucasian*, October 20, 1898. 強調部分の原文は、イタリック。

20 *News and Observer*, June 27, 1900.

21 *News and Observer*, July 3, 1900. ホルトンは、1894 年からノースカロライナ州の共和党執行委員会の議長を務めており、同州の共和党とボピュリスト党の連立の実現に大きく貢献した人物の一人である。同年、彼は連邦議会上院議員の候補者となるが、ジェター・ピチャード (Jeter Pitchard) に敗れた。1896 年には、ホルトン自身はフリーシルバーに対して不支持という微妙な立場をとりながらも両党的連立を再度実現し、州議会議員選挙と共和党知事の選出に貢献した。その後彼は、1897 年から 1914 年まで州の最高法務官を務めた。ホルトンは、1898 年のキャンペーンでも贈収賄に関する風刺画に 2 回登場している。また、1898 年の選挙の 2 日後に掲載された民主党の勝利を印象付ける風刺画では、民主党のシモンズとチェスをしているホルトン

- が対比的に小さく描かれており、共和党の弱体化が意図的に示されている。Gordon B. McInney, "Holton, Alfred Eugene," in *Dictionary of North Carolina*, ed. William S. Powell, 3: 278-79; *News and Observer*, September 18, 1898, October 4, 1898, November 10, 1898.
- 22 *News and Observer*, June 28, 1900, July 22, 1900, July 24, June 27, 1900.
- 23 *News and Observer*, July 15, 1900, July 17, 1900.
- 24 *News and Observer*, July 29, 1900, July 29, 1900, July 27, 1900.
- 25 *News and Observer*, July 27, 1900.
- 26 *News and Observer*, July 24, 1900, July 22, 1900, July 20, 1900; Beeby, *Revolt of Tar Heels*, 209-14; H. Leon Prather, *Resurgent Politics and Educational Progressivism in the New South: North Carolina, 1890-1913* (Rutherford: Associate University Press, 1979), 194-96.
- 27 Populist Party (N.C.), *The Proposed Suffrage Amendment: The Platform and Resolutions of the People's Party*. (1900[?]), 7, 4. [Documenting the American South] available from, <http://docsouth.unc.edu/nc/populist/populist.html>, Internet accessed September 15, 2011.
- 28 Ibid., 7.
- 29 *Caucasian*, July 5, 1900.
- 30 Ibid.
- 31 Ibid.
- 32 United States Department of Commerce, *Bureau of Census, Twelfth Census*, 1900, Vol. I, Part I, Complied from Table 92, 992-93. [U. S. Census Bureau] available from, <http://www2.census.gov/prod2/decennial/documents/33405927v1ch14.pdf>, Internet accessed September 15, 2011.
- 33 *Caucasian*, June 14, 1900.
- 34 *Caucasian*, July 12, 1900.
- 35 *Caucasian*, July 26, 1900, July 19, 1900.

